

第一章「世界で一番、大切な君へ 始」

「じゃあ、君は世界の終わりに僕を選んでくれるのか、コーエン」

僕の疑問に彼、コーエンは若干、目を見開いて驚いたようだった。

そして、すぐククツと含み笑いをして茶化すように言った。

「そんな運命づけられた恋人同士みたいな関係だったのかい……僕達は？」

コーエンは、これは傑作だ、という風に手を叩き笑っている。

「……何がそんなに可笑しい」

この問いは僕にとつて、かなり重要なものだった。

だからこそ、彼のその取り合ってくれないような態度が僕を苛立たせた。それを示すように彼に対して咎めるような声音を強くする。

「僕は真面目に聞いているんだよ、コーエン。それをそんな風に茶化すんなら、僕はもう帰るぞ」

言い放つや否や、言い過ぎたとも思った。

その罪悪感から逃げるように思わず顔をそらす。その仕草を悪い方向に取ったのか、後ろで

コーエンがオロオロしているのを感じる。

どうしようかと思ひ、ふと見上げると桜の木が目に入った。季節は春分、咲きかけのつぼ

みがゆらゆらと揺れていた。

花となつて散るには、まだ時間が掛かるだろう……

何故だか、その事にひどく安心した。

「……あやせ君！」

振り向くと彼、コーエンが申し訳なきような表情をしていた。

「ごめん、ごめん……ちゃんと謝るからさ、そんなにすねないでくれよ」

「……」

僕は直観的に彼のその言葉からは謝罪というよりも、犬をあやかして宥める、それを感じとつた。

「えーっと、あやせ君……話をもどそうか」

そして、それは間違ひではなかった。

「なんだっけ……？」 僕と君がアダムとイブになって、世界を創世する話だったかな？」

そうやって相も変わらずククツと笑う彼に、僕はため息をついた。

そして、立ち上がり歩きはじめる。

何のために？

そんなの帰るためだ、くだらない。

「あやせ君」

歩きかけた背中に声が掛けられた。

何故だろう、彼がそうやって声を掛けることを僕は予感のようになっていた。

振り向くと、ようやく真面目な顔をした彼と目が合った。そして、その淀みない彼の目から、

淀みない質問が投げかけられた。

「あやせ君、どうして急にそんなことを聞くと思ったの？」

どうしてと聞かれても……そんなこと、僕にもよくわからなかった。

ただ、彼にはそれを確認してもいいんじゃないかと思っただけのことであり、それに関して

特に答えるべき理由なんてなかったし、答えようもなかった。

そうして答えあぐねている僕をコーエンはただ、じつと見つめる。彼の視線は、急がなくて

もいい、焦らなくてもいいと語っている。しかし、それは、始めから僕の言葉に期待なんかして

ていないようにも思えた。

そして唐突に、胸を何かに締め付けられる様な錯覚を覚えた。得体のしれないそれはゆつくと

りとくいこむようにして、この胸を締め付け、それに僕はすぐ耐え切れなくなった。

いったい何に……？

僕はいったい何に耐え切れないのだろうか。何が僕をその不安の底のようなものに駆り立てている？

それはこの胸に手を突っ込めばつかむことができるのか、はたまた頭を開頭すれば瞳のレン

ズが移してくれるのか？

それとも……

それとも……彼に聞けばわかるのだろうか？

君は……答えてくれるのか、コーエン。

口を開く。

言葉は考えない。

口を開きさえすれば、僕の代わりにこの口が代弁してくれる気がした。

しかし、そんな都合のいいことが起こるわけがなく、僕の口はただ継ぎのように哀願の言葉を

紡いだだけだった。

「君は……君は明日も僕のそばに……僕の心のそばにいてくれるのか……コーエン？」

瞬間、コーエンは口だけを微笑の形にした。

「それは違うよ」

その微笑は僕を許すように、僕を安心させるように、そして僕を見透かすようにひしゃげて

いく。

そして、彼は言った。まるでこのためだと言わんばかりに。

「明日だけじゃない……僕はいつまでも、君のそばにいるよ……」

「君が望むなら変わらず、永遠にね……」

季節は春分……桜の花はまだ咲きかけで、まだ……あと当分は散るのを見ることはなさそう
だ。

「だって、僕は君の親友だから……」

*

いつだったか、君は僕にこんな話をした

自分以外、誰にも見えない人がいるとして、君はその人と友達になれる？

君の中にある、全ての事を話してあげられる？

この時はまだ、そして何故、彼女がそんなことを聞くのか、何一つわからなかった

だけど、何故だろう……その時、僕は必要もなく賢明であるかのようなフリをしてしまった

何の思考もせず、僕の口から出た言葉を君は忘れてしまっただろう

だけど、まだ思い出せるなら……まだ僕がいたあの日を覚えているのなら……

あの日の言葉を思い出してほしい

僕の賢者であった君になら、わかるだろう

誰にも見えない人……

君の言うそれに、僕はなりたかった

君のそれに僕はなりたかっただけだった

*

桜が芽吹き、カレンダーが四月のページを開き始めた頃。僕らの高校は出校日なるものを迎えた。

当然、僕も形式上は高校生なので、学校には行った。

行ってみれば、なんてことない。ついこの間までは、同じ空間で授業を受けていたのだ。それが今更、劇的な変化を上げるなんてことはない。

春休みの宿題の提出、ちよつとした先生の小話……その程度だ。

その諸々を終えて、今クラスは少しざわめいている。

久しぶりの級友との再会に花を咲かしているらしく、久しぶりーだとか、春休みどうだったーとか、そんな会話が聞こえてくる。

僕はそれを尻目に帰宅の準備を済ませて立ち上がった。

その時、ふと学生の一人が近づいてきた。

名前は思い出せない、しかし見覚えはある。彼はクラスでも、よく発言して目立つ。いわば、このクラスの中心的存在だった。

「綾瀬君、ちよつといいい？」

「いいけど……どうしたの？」

「いやあ、久しぶりにクラスの皆がそろったから、どっかご飯食べに行こうって話があるんだけど、暇なら綾瀬君も来てよ。まだ微妙な数しか集まってないんだよね」

彼が顎を使って示した方には、確かに生徒が数人集まっている。だが本当に数人だ。

彼の言ったようにあの人数なら、ほとんど身内だろうし、せつかく出校日を使ったクラス会にはならないのを見て取れた。

だからこそ、僕に声をかけた、というわけではない。客観的にみても、僕には彼のようなカリスマもなければ、クラスでよく発言するわけでもない。それに、彼のようにイケイケな感じでもないはずである。

そういう事から判断するに、彼はただ何となく、僕に声をかけたのだらう。ただ、クラスでもあまり目立たない僕に声をかけてくれるあたり、彼が俗物的な考えの持ち主ではないことがわかった。

まあ、単純に何も考えてないだけかもしれない、それともお節介焼きのどちらかだろう、多分。

「えつと……ごめん、今日は用事があった……」

「あつ、そうなの。バイトとか？」

「……そうだね。誘ってくれたのにごめんね」

「いいよ、いいよ。じゃ、バイト頑張ってるね」

そう答えて、彼はまた別の生徒のところに小走り駆けていった。

僕だけに声をかけているわけじゃないらしい。

当然だ、と僕の中の何かがそう繰り返していた。

彼を見送って、僕は無言で教室を出る。そのまま、下駄箱へいく。

いつも通り靴を取りに行くはずだったが、今日はそのいつも通りとは違った。

女の子だった。

初めに目に付いたのは、陽に照らされようようと煌めく髪。どこかすんだような赤が掛かった、さらさらとしたショートボブはそのくすみ故にキラキラと陽の光を反射していた。

目は若干のつり目、それでいて静かでどこか落ち着いた印象。

しかし、瞳には何かしらの強い意志を宿っている。

それは、ガラスでできたナイフのように研ぎ澄まされていた反面、すぐ粉々になってしまいうる……

そんな女の子だった。

時が止まったようだった。実際、彼女を見た瞬間、僕の体感時間は止まっていた。

こちらに気付いた彼女が、コマ送りのように近づいても僕の時は相変わらずの体だ。

「あの……すみません。この学校の教職員室の場所をお聞きしたいんですけど……」

「えつ……あつ……」

僕は一応、相槌をする。しかし、まったく要領を得ない。それどころか、よく見ればうちの制服ではないとか、唇が薄いとか、関係ないことをぼつと考えていた。

そして、唇に合わせたピントを、そのままにスライドする。

唇、鼻、目……

そこまで行つて、彼女と目があつた。瞬間、彼女の若干、つり気味な目が陰しくなる。

彼女の鋭い視線に肉薄される。

「あの、私の顔に何かついていませんか？」

「えつと……そんなことはないです」

「そう、なら人の顔をそんなに、ジロジロ見ない方がいいと思います。不愉快に思う人もいるので……」

彼女は、そう言い放つと、くるりと踵を返して歩き始めた。しかし、一定のリズムに揺れる髪に誘われるように、彼女のことを呼び止めてしまった。

「あの……」

彼女は立ち止まる。しかし、こっちを向くことはない。

「……突当りに。職員室はこの突当りのところに……」

やつのことで絞り出した言葉に、彼女はこちらを一瞬だけ一瞥して、どうもありがとうごさいました、とだけ言い、去って行った。

「……」

残された僕は、なんだか死にたくなってきた。

*

学校を出てから、僕はあてどなく歩いていた。

季節はまだ清明、桜の花はもう咲いてしまった。もう少ししたら、散り始めるだろう。その事が無性に寂しかった。

そうやって、目的もなく歩いているつもりだったのに、僕は明確な意志を持って、ある一画で立ち止まる。

そこは公園だった。公園と言っても、遊真なんて何一つない。あるのはベンチと時計台、そして自販機程度だった。

そんな公園に何の用があるのか、別に何の用もない。強いて言えば習慣みたいなものだ。だからこそ、たどり着いたとも言える。

慣れた足取りで、広場に入り自販機でコーヒーを買う、缶を手でもてあそびながら、ベンチに座る。

カチツと小気味よい音を立てて、缶を開ける。買ったのはブラックコーヒー。

別にブラックしか受け付けない性質ではないし、カッコつけたかかったわけでもない。ただ、今日はこの苦味が僕を引き締めてくれるような気がした。

一口、口を含む。ただ、苦いだけだった。

「僕の分のコーヒーも買ってきてくれた？」

唐突に、隣から声が響いた。振り向くとそこに微笑を湛えた青年がいた。

しかし、驚かない。こいつはこういう奴なのだ。

「自分で買ってくるんだな、コーエン……」

コーエン、僕がこの公園に来ると決まって現れる、僕の唯一の話し相手である。

いつも、ニコニコとした微笑を湛えており、能天気な奴かと思うと、含みのある物言いをする……そんな青年だった。僕は彼と話すために、いつも、この何もない公園まで僕は足を運んでいる。そんなことがもう随分と長く続き、それはもう習慣となつて、学校帰りの僕をここへ連れてくるのだった。

「ひどいなあ、あやせ君は……。親友の一人に缶コーヒーを奢る事さえしてくれないのかい？」

「じゃあ、これをやるよ」

「……」

彼はそれを受取るうとしなかった。

「あはは……僕、ブラックは苦手なんだ。」

「あれ、そうだった……」

「そうだよ、知ってるでしょ？」

「いや、知らなかったよ」

彼がブラックを飲めないことに、大した驚きなかった。考えてみれば、僕の方も普段の彼の含みのある物言いや振る舞いから、勝手に「飲めそう」というイメージを持っていただけだ。

「ねえ、あやせ君、僕の好みは知ってる？」

「……さあ」

知る由もなかった。彼とは長い間、話してきたが、コーヒーの好みなんて話なんてした覚えはない。

「じゃあ、あやせ君の好みを教えてくれよ」

「僕の好み？ 僕のコーヒーの好みなんて知ってどうする？」

「いいから、いいから」

正直、気のはしなかつたし、そう言われて考えてみると、好みとかの以前の問題であることに、より僕は閉口した。しかし、隣のニコニコとした彼を見ると、なんだかなあ、となつて、しようがないから答えることにした。

「甘い奴……苦いのは飲めないから、甘い奴なら、なんでもいいよ」

「それって好みなの？」

「……」

「コーヒーの好みて、エスプレッソとかアメリカンだとか、そういうのかと思っただけ……」

あやせ君、君のはー

「うるさいなあ、変わんないだろ、そんなの」

多分、と付け加えて、僕はこの話を切ることにした。しかし、彼、コーエンは唇の微笑をより深くして続けた。

「でもー そうだと思つたよ」

「……？」

「君がそうなら、僕もおんなじだよ、あやせ君」

「……何が言いたい？」

時折、彼はこんなふうに含まのある事を言う。はたしてそれが意味のあることなのか、全くの無意味なのかは、かれこれ長い間、計りかねてきたことだ。そして、それだけが唯一、僕が知ることのない、彼の一面だった。

「いや、別に深い意味はないさ、ただの世間話。そうだろう？ コーヒーのお話なんて僕らに

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

は全くの管轄外のことだ。興味の対象であつても、必要の対象ではない。君と僕とでは、もつとしなければならぬ話があるはずだ」

「そう、饒舌に言い切つたコーエンは、僕に向き直る。」

「だから、そろそろ本題に入ろうか……あやせ君もそう思うでしょ？」

「本題？」

「そう、と言つて彼はわざとらしく相槌をいれる。」

「あやせ君……君の話だよ。君が今日、この日、体験したこと……良い事、悪い事、くだらない事、驚いた事……。そして、君がその事にどう思ったか、どう感じたか……それを僕に話してくれ」

「どうして？」

「どうして……？ どうしてはないよ、だつてあやせ君。それはわざわざ、ここまで足を運んだ君が一番わかつてるんだらう？ 僕はいつ、いかなる時でも、この公園で、このベンチで……あやせ君、君の話聞いてきた。それが僕たちの習慣、規則……いや運命と言つてもいい。」

「……」

僕は無言のうちに同意していた。実際、僕は幾度となく彼、コーエンとこの公園で対話をしてきた。それが大事であらうとなかろうと僕は、僕に起こつた何かしらの出来事を彼に話し、彼の意見を求め、彼と結論つけた。詰まるところ、彼の言う通り、この場所での対話は僕たちにとつて習慣であり、規則であり、運命であつた。

僕は、そうだなと彼の主張に同意を示しておいて尚、言つた。

「でも、今日は嫌だ……話したくない」

コーエンは困つたなあ、という風に頭をかいた。

「何でもいいんだよ、別に。今日、君がクラスの友人の誘いを適当に断つたとか……そんなんでもいいんだ」

彼の顔を一瞥する。そこには何の悪意も茶目つ気もない、というようなわざとらしい顔だつた。

そのことに馬鹿らしくなつて言及する気にならなかつた反面、別に彼なら知つていても何ら不思議ではないと思う自分がいた。

「別にあれはそんなんじゃないよ、ただ……」

「ただ……どうしたんだい」

「ただ……」

「ただ……」

「ただ……」

ただ……できなかつた

「いや……なんでもない」

「……」

「それにあの誘いを僕が受ける必要なんてなかつた」

「何故？」

「何故つて……彼は僕だけを誘つてるわけじゃなかつた……だから、あそこで僕が行く意味なんてなかつたんだ」

「意味がない？ ……それは違うよ。別に君以外が誘われていたことが、君が行かない理由にはなり得ない。集団心理は人の意志そのものを変質させるわけじゃない。だから、意味があるか、どうかなんて、あやせ君……君次第だよ、そうだらう？」

その言葉に僕の理性は賛成していた。しかし、感情がそれを超えて、当てつけのように言葉を紡ぐ。

「仮にそうだとしても、あの時、僕一人で意気込んで行くのは、なんか違うように思えたんだ」

理論では説明できない破滅願望にも似た否定。

つまりは、僕はどうやってでも、僕が行かなくてよかつた訳を正当化したらしい。例えそれがどんなに破綻したものであつたとしても、だ。

しかし、コーエンはそれでは納得しなかつた。

「あやせ君、さつきから君の言葉にはまるで主体性がないよ……。やれ、違つて子が行くから僕は必要ない、やれ僕が行つても迷惑だ……それは所詮、誤魔化しや脚色にすぎない、それこそあやせ君が言う必要のないものに該当するんじゃないかな」

何か誤魔化している、そう言つたコーエンは続ける。

「あやせ君、僕が言う主体性っていうのは君の素直な気持ちだ。君が仮に必要な、迷惑だと思つたとして、そこにある君の気持ちは何故そう思つたかだ。そこにある純粹で、単純な思いこそ僕が知りたいと真摯に思つているものであり、それを聞かなければこの対話は何の意味もなさない」

それが君の破綻の理由だよ、と付け加える。

そして、僕の反論を許さないように畳みかけた。

「だから、ただ……どうしたんだい、あやせ君？」

僕とコーエンの間に訪れる緩やかな沈黙。それは時間という名の自白剤となつて、僕の重い口を開かせた。

「ただ……」

ただ……信用できなかつた、それだけだよ

コーエンは張り付けた微笑を崩すことはなかった。

しかし、僕には何故だか、その表情が満足げなものに感じた。

コーエンは言う。

「その気持ちを忘れちゃいけないよ……。その不信感こそが君が守らなくちゃいけないパンドラの箱だ」

僕は彼の言葉の意味を、意議を、意思を計りあぐねていた。だが、それは僕たちにとって追及さえしてはいけない、文字通りパンドラの箱であるのは確かであった。

コーエンはふうと息を吐いて、僕の手から缶コーヒーを取り一気に飲み干す。

苦いねと一言、口にして彼は舌を出しておどけて見せた。

そして、唐突に言い放った。

「まだ隠していることがあるよね、あやせ君」

驚いて目を見開くも、そう断言する彼の瞳から、僕は何の真意も汲み取ることができなかった。それどころか、彼の瞳は僕を見透かすレンズのように思えた。それが嫌で、僕はコーエンから目をそらす。

しかし、コーエンはますます微笑を優しくする。

とてつもなく嫌な予感が僕の頭のなかでグルグルとしている。まるで、自分自身の存在を問いかけてられているような気分だった。

コーエンの口が開く。

頭の中でストップがかかる。

ダメだ。それ以上はいけない！

そう声が、警笛が、悲鳴が叫ぶ。

しかし、その問いはあっけなく投げかけられた。本当にあっけなく。

「今日はどうしてすぐに来なかったのさ、あやせ君」

……

……

思っていたほどの衝撃はなかったのが意外であった。まるで初めからこう聞かれるのをわかっていたみたいに、彼の問いは、言葉は、意味は頭に染み込んできた。

僕はゆっくりと顔を上げる。

目の前には彼の優しい微笑と瞳があった。

彼は……コーエンは言った。

「理由を言いなよ」

「それは違うよ、って言ってあげる」

*

「僕がすぐ来なかった理由だって？ そんなの聞いたところで何になるんだよ、コーエン。」自分の声の節々にとげとげしいものが、宿っていることに気付いた。なるほど、僕はこの質問に対して何か良くないものを感じているらしい。

しかし、そんな事、おかまいなしにコーエンは笑って言った。

「何になるだって？ ひどいなあ……そんな言い方はないよ、あやせ君。もしかして機嫌悪い？」

「別に、機嫌は悪くないよ……。ただ、君がくだらない言いがかりみたいなのを、つけてくるから、ムキになっただけだ」

「それを機嫌が悪いって言うんじゃないかな。それに君の方こそ、言いがかりだよ。僕はただ、事実を言っただけだ、君は遅れてきた事を否定しなかった。なら、そうなんだろう？」

「……」

沈黙……

コーエンはそれをESと受け取ったらしい。

「なら、話は早い。起こった事象には必ず理由がついてくる。それに後付なんてものはない。

だから、君には何かしらの言い訳も、言い分も、主張もあるはずだ。友達に付き合わされたとか、来る途中で猫が死んでたとか……優しい君のことだ、供養してあげたんだろう？」

だから、くだらない言いがかりだなんて事はないよ、と付け加えた彼の微笑は、皮肉の形に歪んでいた。

「ありもしない妄想話もいい加減にしてくれ、コーエン。僕は君の言うその理由とやらを聞いて何になるって言っているんだ、わからないのか？」

「あやせ君、それが何になるかなんて、それを知らなきゃわかるわけじゃないよ。笑い話になるかもしれないし、くだらない与太話になるかもしれない、そして……」

「君が避けようとしているものの根幹に繋がるかもしれない」

僕は驚いて彼を観る。その優しい微笑からは何一つ窺い知ることはできない。

その微笑は僕を試すように、僕を疑うように、そして僕を見透かすようにひしゃげていく。

「教えてほしいな、あやせ君。今日、君が回り道までしてここに来るのを躊躇わせ、挙句の果てに飲めないブラックコーヒーを買わせた、その「理由」を……」

「……」

理解しがたい気分であった。目の前の青年は不気味だ、何のためなのかかわからない微笑を張り付けて、何のためかわからない質問をする。

彼は紛れもなく不気味だった。

しかし、同時に僕の中にも不気味な安心が張り付いていた。

何もかも見透かすような瞳で、何もかも許すような微笑で、何もかも暴こうとする。

そんな彼に対し、絶対的な安心を感じている。

そんな僕自身がそこはかとなく不気味だった。

僕はしばし、自問をする。いや、そうしなければならなかった。

そうすることで僕は、自らの疑義心を……いや、彼に対しての安心を……もつと言うえば彼の存在さえも明かすことができるような気がした。

しかし、そんな刹那の思考では、はっきりとした答えは一つも浮かんでこなかった。

代わりにある事が思い出される。

この公園にまつすぐ来なかった「理由」、飲めないブラックコーヒーの苦みを欲した「理由」、今日がいつもと唯一、違った「理由」。

「……」

答えは出た。

しかし、僕はそれを答えたくなかった、僕では答えられなかった。

ふと、気づけばコーエンは僕を見ていた。

僕が自問自答している間、彼はずっと僕を、その優しい微笑で見ていた。

そして、彼の微笑は、答えが出た、という形をしている。

それは僕自身にとつても同様のことだった。

僕が沈黙を貫くこと、そして彼自身がその「理由」を言うこと……

はあーっと、長い溜息の後、彼の微笑は言葉を吐くために開いた。

「今日、下駄箱で会った、あの少女に君は……」

目が合う、彼のレンズは僕の何を映すのだろうか

「君は……」

そこまで、言うや否や、彼は首を振って不問にした。

彼にしてはめずらしい。どうしたのだろうか？

その代わり、彼はいつもの警告めいた助言をする。

「あやせ君、君は明日もここに来なくてはいけない。」

「……」

「返事はしなくてもいい……ただ、君は、君の生き方を忘れてはいけない。それが解らなくな

った時、君はここに来なければならぬ、そうだろうか？」

僕は無言で立ち上がった。そのまま歩く、陽は既に落ちていた。きれいな紺のグラデーショ

ンが降りかかり、ハイライトのような電灯だけが公園を照らしている。

季節は清明……桜の花はもう咲いてしまつて……もつすぐ……散るのを見なければならぬ

だろう。

最後に僕はゆつくりと振り返り、彼に……コーエンに問いかけた。

「コーエン、なんで君は、僕を裏切らない……？」

コーエンは、目を若干、見開いて驚いた。そして、すぐに唇をいつもの微笑に歪ませる。

その微笑は僕を許すように、僕を安心させるように、そして僕を見透かすようにひしゃげていく。

しかし、その微笑はついこの間も見たことがあるように感じた。

そして、続く言葉も僕は知っているような気がした。

「だって、僕は君の親友だから……」

その日、僕の口にはコーヒーを一気飲みしたかのような苦味がいつまでも広がっていた。

*

翌日、僕はコーエンとの会話を反芻しながら学校に向かった。

しかし、いつものことだが、彼との会話は思いだして整理してみようとしても、絵のないパ

ズルのように捉えどころがなく、彼が何を言っていたのか……また僕自身が何を思っていたのかさえ、霧に包まれたようにわからなくなつてしまつた。

その何度目かの思考の繰り返しの中で、僕は校門にたどり着いてしまった。

輪のような思考を断ち切り、僕は上靴に履き替え教室に向かった。

ぼうつと窓枠で仕切られた空を見るとチャイムが鳴り響き、ホームルームが始まった。

始業式でもある今日、この日は体育館に集まり全体朝礼を行うらしい。体育館に向かう生徒

の波の中、僕はふと昨日出会った、あの黒髪の女の子の事を思った。

彼女の鋭い刃のような眼差しが思い出されて、なんだか萎縮した……どこぞのブラックコー

ヒーよりも余程、僕の精神を引き締められる。

そんな事を思っているうちに生徒の波は体育館にたどり着き、校長先生らしき人物の演説が

始まつた。

そこで僕はまたしても窓から見える青空を眺めていた。

ふと、桜の花びらが僕の目の前にヒラヒラと舞い降りてきた。どこか空いていた窓から入っ

てきたらしい。

僕がそれを掬い取ろうとすると、花びらは僕の手を避けるようにすり抜け、床に落ちていっ

た。

当然だ、と僕の中の何かがそう繰り返していた。

教室に戻ると間もなく先生が入ってきて、あることを告げた。聞くに転校生が来るとか来ないとか……

関係ない。今更、僕にはどうだっていい事だ。

そうやって、僕はまた窓から空を眺めることに没頭した。

この時、何故だか僕には何の虫の知らせのようなものはなかった。

日常のささやかな裏切りに対する僕の中の安堵も、公園で彼と話している時に感じる予言のような警笛も今回はまるで作用してくれなかった

そして、その時は訪れた

「失礼します」

その声に僕の体感時間は再び止まった。いつか聞いたことのある、その声音が僕の中の神経信号を、血流を止めた。

その止まった時間の中で彼女だけはその赤の掛かった髪を揺らし、凜として歩く。

教壇まで赴いた彼女はチョークを手に取り、ゴシック調の文字を黒板に書いた。

夕風かおる

それは昨日、下駄箱で出会った少女であった。

「転校生の夕風かおるです。よろしくお願ひします」

彼女は淡泊な挨拶を終えると、空いている僕の席の隣にツカツカと歩いてきた。

そこでようやく目が合って、彼女は彼女で目をしばしばさせて驚いていた。

その仕草が彼女の第一印象からは考えられないような可愛さで、僕は思わず見惚れてしまっていた。

しかし、彼女はそんな顔を周囲に悟られる事なく、表情を先ほどの凜としたものに直す。

そればかりか、より一層、目を絞り僕を射抜くような視線を放ち始めた。

……人は過ちを繰り返すものであり、これは今の僕にとつても例外ではなく、それどころか僕は今、まさにその当事者であった。

彼女は昨日の倍ほどの嫌悪感をのせて言い放つ。

「人の顔をジロジロ見ないでくれない、気持ち悪いよ」

そう言うと、素早く席に着き、わざとらしく僕の席から距離を置いた。

ズザザッ

そんな音がしたように思う。

その音は彼女の中の僕の存在を引き摺り下ろす音であった。

僕は、軽い嘆息をすると三度、窓の外を見やった。

季節はもう何となく春だ。あんなに嫌だった、散っていく桜も今では全部、散ってしまえとさえ思っていた。

空を一人淋しく見つめる僕は、なんだか死にたくなってきた。

第二章「僕の世界を作った君へ」

季節は夏至、桜の花はとうに散り、新緑の葉が芽吹いていた。

青々としたそれらを見つめながら、僕は学校への道を歩いていた。そして、たどり着いた下駄箱で上靴に履き替える。

僕はそこで約二か月前、ここで出会った少女の事を回想した。

さらさらとした赤が掛かったショートボブ。

若干、つり気味な目。

鋭い視線。

そのどれも僕の中で鈍い光を放ち、こびりつくようにして、僕の頭の片隅を占拠していた。戸惑っていた。

今まで感じたことのない、自らを無条件で明け渡してしまいたくなるような、期待にも似た感情。コーエンとの会話で感じる、底が見えない安心のようなもの。

それを僕は彼女の隣で過ごした、この三か月あまりで感じていた。

そのことが今までの僕には考えられなくて、初めてで、そして僕をどうにかしてしまいそうに戸惑っていた。

僕はこの所、毎日あの公園に行き、彼にこの事を話した。しかし、彼はいつものごとくのらりくらりと会話の焦点をずらすだけで、この話には触れようとしなかった。

そして、ただ僕に忠告にも似た助言をする。

それはコーエンとの会話で、いつか言った信用についてのことだった。

彼によるとそれは僕の中で、僕が感じる、純粹でただ一つ変わらない絶対条件なるものらしい。

それについて僕はいまいち、ピンとこなかったが、コーエンに抱くあの不気味な安心はそれよりの感情であることを僕は得心していた。

そしてなにより……僕の彼女へ対しての気持ちもそれよりではないかと僕は感じていた。

……いや、願っていた。

長い廊下を歩いて、僕は教室に入った。

自分の席を目指す僕は途中、彼女、夕風かおるが、僕の席の隣席に座っているのを確認する。彼女の赤髪は教室の窓から入る朝日でキラキラと光っていた。

それについて見とれてしまいそうになったが、僕はそれを横目に収めるだけにして自分の席に座る。

机は彼女が最初に座ったあの時と変わらず、一定の距離だけ離されていた。

それは僕がこの三か月間で「女性の顔をシロジロ見る変態」のレッテルを剥がせずにいる事の証明であった。そして、同じくこの三か月間で、僕ができたことと言えば、そのレッテルをこれ以上、酷いものにならない、それだけだった。

席に着いた僕は、隣に座っている彼女を眺めていた衝動を抑え、窓を眺める。

そうして、彼女が僕に抱いた勘違いの払拭を、少しでも試みる僕であったが、効果があるかないかで問われたら、そんなもの当然のごとく全く効果はなかった。

むしろ、窓ばかり見ている変な奴という、新たなレッテルを貼られかけていることは残念ながら僕は気付いていなかったであろう。

さらに窓は朝のきつい日差しで覆いつくされておき、僕の目はすぐに痛くなってきた始末である。失明しそうだ、悲しい。

……本当に残念な奴である。

僕が朝日に焼かれた視力の回復に努めるため、机に突っ伏して目を閉じていると、ざわざわした喧噪が耳をついた。

何かと思つて顔を上げ、状況を把握する。今は授業中、科目は社会、そして黒板には「隣の席同士でディベート」と大きく書かれていた。

僕が目を丸くして隣に視線をやると彼女と目があつた。

……わかりやすい程、嫌な顔をしていた。

彼女はすぐに目をそらすとわざと聞こえるように、あのまま寝ていればよかったのに……と呟いた。

そのつぶやきに若干のショックを受けたが、同時に彼女のその度量に感心した。

その事に影響を受けたのか、僕は周りがやっているように自分の机を、彼女の机に近づけようとした。

すると僕が机をずらした分まで、彼女の机も同じだけ横にずらした。

そんなやり取りが何度目かの時、彼女は僕の机を手で押しとどめた。

そして、親の仇でも見るような殺気を込めた視線を向け言った。
「なんで机を近づけるの」

「いや……周りがそうやってディベートしてるから……僕たちもって」

「周りがやっているから、私達も同じ事をする必要はないでしょ。君は周りが死んだら自分も死ぬの？」

「いや、そんなことはないけど……。でも、それだとディベートできないんじゃない？」

「離れていてもディベートはできます。それに第一、君とディベートする気はありません」

すがすがしい程の拒絶に僕は再び感心した。

その時、僕らの問答を遮るように担任教師の声がした。

「そこ、遊んでいないでちゃんとディベートしなさい」

彼女はその声にさえも、目を細めて睨み付けた。教師が一瞬だけたじろぐ。さすがの度胸だ。

しかし、数瞬の間を置き、仕方ないかといった風に大きくため息をついた。

彼女は律儀にも僕の机をもとの位置まで押し戻し、自分の机も同じようにする。

しかし、先ほどよりも僕と彼女の、机の位置はさらに離れたものとなっていた。

「……」

机の位置を離れたまま僕は彼女の方を窺うも彼女は授業プリントに目を落としたまま、こちらを頑なに見ようとしない。

僕はその状況を打開しようと取りあえず質問を投げかけてみる。

「あのさ……ディベートって何をディベートするの？」

それを聞いて彼女は心底あきれたという顔をしたが、とげとげしい声音のまま説明はしなかった。

「今回のディベートは社会信用論についてだけど、聞いてなかったの？」

僕は慌てて、ああ、そうだったね、と相槌を打っておいたが、彼女は疑いの目を緩めることはなかった。僕はそれを誤魔化すようにそれで、と彼女を促す。

「社会信用論については教科書八十四ページに書いてあります。自分で理解してください」

「えーっと、教科書忘れちゃって……」

彼女は目を一瞬ふせてから、糾弾する。

「君……何しに学校に来たの？」

本当はちゃんと持ってきていたが、持っていないという事にして、彼女に見せてくれと頼んだ。

最初は呆れて話しすら聞いてくれなかった、真面目に理解したいという旨を伝え続けると、

こちら側はずいとい教科書をずらしてくれた。

根は優しい子のような……純粹にそう思えた。

僕がイスだけ移動させ、彼女の横に行く。

ほんの少しだけ嫌がって離れたが、開いた教科書の項目一つ一つの説明を始める。
生真面目というか、律儀というか……

別にそこまでの事を求めたわけじゃなかったのに、彼女は真面目に一生懸命要点をまとめ、時に唇に手を当て考え、僕にわかりやすく説明してくれた。

彼女のその一生懸命さが妙にいじらしく思えて、僕はなんだか顔がにやついてしまっていた。そうやって彼女の横顔を眺めていると、彼女もこちらに気付いた。

「ちよつと……聞いている？」

「ちゃんと聞いているよ」

「じゃあ、なんでニヤニヤしてるの？ もともとそういう顔なの、君？」

救いようがないわね、と嘆息する彼女にさえ僕は好感を感じていた。

「いや……。夕風さん、あんなに嫌がってたのに一生懸命に説明してくれるから、優しいなって思ってる」

彼女はそれを聞くと、一瞬だけ目を丸くしていたが、すぐにくだらなめという風な顔をした。

「そんな事を聞くために、君に教科書を見せてたわけじゃないから。もう一人でやったら？」

「ごめん、冗談」

「へえ、私が優しいっていうのも冗談なのね」

「えっ、いや、そういうわけじゃ……」

彼女はほんの一瞬だけだったが、いじわるな笑みを浮かべた。

「冗談よ」

そして、ふざけてないで勉強するわよ、と言い教科書に目を落とす。

「あっ」

ふと、彼女は思い出したような声をあげた。

「私……苗字で呼ばれるのあんまり好きじゃないから、夕風さんって呼ぶくらいならかおるって呼んで、それだけ」

それを聞いて、僕は少しだけ悩んでから、勇気を出して彼女の名前を呼んだ。

「えつと……かおるさん？」

「何？」

「いや、読んでみただけ」

特に意味はないよ、と付け加える。

彼女、かおるさんはチャリとこちらを見て、ふーんと特に気にも留めないように鼻を鳴らした。

僕はそこにかおるさんに自分の名前を、明かしていないことに気が付いた。

「あのか……」

「何？ あまり気安く喋りかけないでもらえな」

「ああ、ごめん。あの、そういえばまだ僕の、自己紹介してなかったよね」

「別にあなたの名前なんて聞いていないのだけれど」

「えつと、いらナイ？」

「……」

しばしの沈黙。その後は彼女はまた、仕方ないかという風に大きなため息をついてこちらに振り向いた。

「名前」

「へ？」

「君の名前よ、もしかして名前ない？」

僕はしどろもどろになりながらも答える。

「綾瀬……綾瀬裕一」

彼女はまた、興味なさそうにふーんと鼻を鳴らして答えた。

「人の顔をジロジロ見る綾瀬君ね……覚えていてあげるわ」

「ははは……人の顔をジロジロ見る綾瀬君ね……光栄だよ」

でしょ？と同意を求めた彼女、かおるさんの顔は少し上機嫌そうに見えた。

取りあえず今日の会話で僕が分かったことは「人の顔をジロジロと見る変態」というレッテルは当分、はがれることはないだろうということだった。

そして、公園で彼に話さなければいけないことがあるという事も……

*

学校が終わった後、僕はいつもの様にあの公園に足を運んだ。

公園に入り、ベンチの方を見やると既に彼が微笑を浮かべて待っていた

「やあ……あやせ君、待ってたよ」

「めずらしいな」

「……？」

彼は微笑を崩さずかぶりをふった。

「君が待つてるなんて今までで初めての事じゃないのか？ 何かあったのかコーエン」

僕はその問いにコーエンはまさか、わざとらしくジェスチャーをする。

「僕は親友であるあやせ君を、ただ待っていただけ……赤い糸でつながれた恋人みたいだね。それなのにそんなこと言うなんて、ひどいなあ綾瀬君は……」

「別に何もひどいとは思わないけどな」

僕はそう言って彼の隣に座り持っていたお茶を一口飲む。

それを見たコーエンはくくつと含み笑いをした。

「今日は前みたくブラックコーヒーの苦みは必要ないのかい、あやせ君」

「？」

僕の頭に彼が何故そんな事を言うのか、という疑問符が浮かぶ。

「いや、何故と言われても……前に、君はわざわざ僕の好みを聞いたことがあったよな？」

「ああ、そうさ……苦いのは飲めないだろう」

知ってるよ、と彼はさも、当たりの様に答える。会話が噛み合わないような気がした。

「ああ、君の言う通りだよ、コーエン。だからこそさっきの言葉の真意が僕にはわからない」

「わからない……？ そんな事はないだろう、あやせ君。……それとも、今日はうまくいったかい？」

彼はそう言うと、その微笑を深くする。彼のその優しい微笑が増す度に、彼の会話は僕の考えが及ばざる次元にシフトし、僕は彼の結論を待つ他なくなってしまうように感じた。いや……実際にそうなのだろう。

だから、僕ができることは彼から、その何かを引き出すことだけだった。

「……コーエン、何が言いたい」

彼は笑う。ただ笑う。まるで何かを待っていたように

「何が言いたかった……」

「何か言いたかったのは君の方だろう……あやせ君」

僕はもう驚きはしなかった。否定もしない。彼のその問いはあるべくしてあったのであり、僕はそれを受け入れる他ない。そして事実、そうなのだ。

「ああ、そうだよコーエン。今日、僕は君に話がある。以前、話した信用についてだ」

コーエンの方を窺う。しかし、彼は見透かすような微笑を湛えるだけで何も答えてはくれなかった。

僕は彼のその微笑に答えるように、シンプルな命題をぶつけた。

「コーエン……信用とはいったい何だ？ 僕の中のそれについて、君は何を知ってる？」

コーエンはその命題を受け、彼にしてはめずらしく口を手をあて考えていた。

そして、しばらくそうやっていた彼は、唐突に提案めいた言葉を口にした。

「信用の条件は何だと思っ、あやせ君？」

「……信用の条件？」

そう、と手振りをして彼は言う。

「君の中の信用というものが何を欲しているか……。そして、何をもち、それを信用とするか、だ」

「僕が……何をもち、それを信用とするか……？」

検討もつかない……まず、第一に信用というものを僕は全く把握していないのに、それが内包する条件なんて、僕にとっては晴天の霹靂以外の何物でもなかった。

「あやせ君……別にこれは難しい命題なんかじゃないよ。君の中で、君自身が何を最優先にして君を律しているか、それ以前に君自身が何を求めているか、だ」

僕が何を求めているか……それは……

「わからない」

「そうだろう……あやせ君」

「いや……正確には今のあやせ君ではわからない……か」

コーエンは、把握してるよ、という風に口の端を歪めると、考えている僕を尻目に話を続けた。

「君の中にある信用を満たす最低限で唯一無二のもの……それを僕達の把握できる言葉で言うのなら……普遍性でも言おうか」

彼は人差し指を僕の目の前に立てる。その向こうにあるコーエンは笑みを張り付けたまま、雄弁と語る。

「普遍性……いわば変わらざるもの、悠久と共にあるもの……。でも、この物質界に安定に存在し続ける物なんて、まず存在しない。それならば人である僕達の情動なんてものは、むしろ正反対のそれだ」

コーエンの微笑は増々、優しくなっていく。

「今、僕たちが抱えている悲しみや、怒り、そして喜び……そのどれもが僕らが瞬きをする、その一瞬に、別のものにならない保障はどこにもないんだ……むしろ、むしろだよ。あやせ君……君が今、感じている君の気持ちは変わらさず一定を保ち続けることができているかい？」

その保障はどこにもないだろう、そんなコーエンの言葉が歪の音叉のように、僕の頭の中に反響していた。その反響した境界面に、今日、ともに話した彼女の顔が映った気がした。

そして、彼女の事を思うのと、コーエンが虚をつくのは同時であった。

「彼女についても……そうだろう？」

今まで目にしたことのないような邪悪な笑みでコーエンは僕に問いかける。

「それは君にとって本当に必要なのか？ さらに言うなら、君の目に今まで映ってきた虚構の数々に、彼女が埋もれている……それを否定できる要因を君は探し出せるのかい？」

「……」
彼の言う通りだった。僕が今まで、関わりを避けていた、彼の言うところの信用に値しない

人間と、彼女……かおるさんとの明確な差異のようなものはどこにもなかった。

それどころか、彼女はその信用に値しない人間と同じ穴の貉であって然るべき存在ではないのか……。

そう思うと僕の中に諦めにも似た開放感のようなものが、思い出したように湧き出してきた。それはいままでも僕の人生で慣れ親しんできたものであり、ずっと共にあったものだ。

それは、これからもそうなのだろうか……。

僕はこの時、この思いに初めて否定を試みた。僕を捕えて離さなかった、麻薬のような諦めに対して疑問を抱くことができた。

そして、一瞬のうちに霧散していく、それははざまに僕は彼女を見た。

「それは違う」

コーエンの微笑は崩れない。しかし、顔は笑っていない気がした。

「お前は言ったよな、いつまでも変わるこのない悠久なんて存在しないって……。僕もそれはわかる。だけど、それは僕達の未来に対しても同じはずだ。だって、変わらない不定形を刻み続けるもの。それを未来と呼ぶんだろ。」

「僕には未来の事は何もわからない、だから、コーエン……僕は今まで君と共にそれを探す旅をしてきたんじゃないのか？」

「そして、君の理論で言うならコーエン……お前も例外じゃないぞ」

「僕は君の事も信用したわけじゃない。これは僕の本心だ」

勢いに任せて言った、その本心という言葉に僕自身が多少の引っかけりを感じた。そして、それは彼にも同様だったらしい。

コーエンの微笑はそこでようやく待つていたとばかりに、僕に反論をした。

「それは違うよ……」

「本心……本当の心……君はそう言ったね。だけどそれが本当だって、何でわかったのかい？ 本当のもの本物、そんな物、君はどうやって判断した？」

彼の言葉に僕は答えることができなかった。

「本心に聞いたならそれが君その物だなんて、そんな確証なんてどこにもないだろう？」

曇り巻き眼、本当の自分変わらざる永久……そんなものはこの世界のどこにも存在しない。

「あやせ君……。でも、それに一番、近いものは確かに存在するよ、何だと思っ？」

……

ふと風が待つて、夏の青々とした香りが鼻腔をくすぐる。

季節は夏至、新緑の葉を芽吹かせる桜木が風に揺れ、夏の到来を祝っているかのようだった。その事に僕は、いつか朽ちるその姿を思わずにはいられなかった。

変わらない物なんて存在しない。

そういつたはずの彼は矛盾した言動を、確信を持つて僕に問いかける。それは自身、己の身すらかけた存在証明であると、そう彼の目は語っているような気がした。

僕はその不気味な気迫に後押しされるようにたどたどしく言葉を並べた。

「……それは、物理法則とか、母の愛情、そして……死、そのあたりじゃないのか？」

一秒にも満たない沈黙、それから彼はゆっくりと口だけに微笑を浮かべた。

——それは違うよ——

「そんな奴らいずれ変わる、この地球が減ればいずれ跡形もなく消えていくよ」

「だけど、君のとって本当は僕だ」

……訳がわからない。彼は何を言っている。

「君は言ったよな……あやせ君」

本心だって……

彼は僕から目を話すことなく、僕に時間を与える。頷き、肯定するための時間を。

「ああ……言ったよ、嘘偽りのない本心って」

彼は僕の言葉を確認すると滑らかに答えた。

「僕に聞けばいい……そんなもの、僕に聞けば一発だよ」

だってそうだろう。そう言つて、コーエンは口だけを微笑の形にした。その微笑は僕を許すように、僕を安心させるように、そして僕を見透かすようにひしゃげていく。

「だって、僕は君の親友だから」

そういつた彼の目は、僕のことを全て見透かすレンズであった

「……ねえ、ちよつと！」

「えっ……ああ」

目を覚ますと真横にかおるさんがいた。

「君……また、寝てたの」

「……」

周りを見渡すとクラスの生徒がプリントを前の教卓に集めていた。

そこには後悔のような溜息と、解放感や達成感からの歓声の二つがあった。

「寝てたから、回収されなかったよ……テスト」

「そう……」

今日は期末テストの最終日であり、今さっき僕が伏せている間の最後の試験が終わったようだ。

「そう……じゃなくてさ、早く出しに行ったら？ 0点になるよ」

「ああ……うん」

そう、曖昧に返事をして、前に行きテストを出す。

帰ってくる時、かおるさんが説教をする顔になっていた。

「君さ……もう少ししっかりしたら？ いつも寝てるか窓の外見てるかだし……話しをしててもああ、とか、うんとか……将来、だまされちゃうよ」

「騙されるって、何に？」

「何につて……そんなの全てよ、君は全てに騙されるよ」

僕はそれを聞いて笑ってしまった……それは僕の親友のそれと似ていた事に、僕は気付かなかった。

「ふふっ……全てに騙されるって面白いね、かおるさんは」

「そのなよなよした笑いかた……やめたら気持ち悪いよ」

「ごめん、ごめん……でも、あながち間違っちゃいないかもね」

「？」

「いや、こつちの話だから、気にしないで」

彼女は怪訝な顔をしていた。

「君……なよなよよしてると思ったら、時たま、わからない物言いするよね……」

「そう？」

「そうよ」

と言いつ、彼女は鞆を持って席を立った。

「じゃあね、綾瀬君」

僕はそれを無言で見とげると窓を見やった。

季節は大暑、桜の葉はくたびれたように揺れ、陽炎が人々の認識をほやけさせる。

しばらくしてから、僕もいつもの様に公園に向かおうと思っていたが、教室の出口付近でおるさんの会話が聞こえてきた。

「あの……私、もう帰るので……」

「待って、待って今日、この後クラスみんなで遊びに行くんだー夕風さんも来ない？」

「私は……」

「いいじゃん、いいじゃん、夕風さん付き合ひ悪いよー」

……どうやら数人と話しているらしい。

「夕風さん、転校生ださこういう集まりに一回は出た方がいいよ」

「そうそう、付き合ひ悪いと思われちゃうしね」

「そうなるよ、クラス居つらくなっちゃうから、結構大変だよ」

「……」

「どう夕風さん……？ さすがにバイトとかがあるなら無理に誘わないけど」

「……はあ。わかった、行くわ」

「やった、やった夕風さん可愛いし男子も結構来てくれるかもね」

「そんなことはどうでもいいけど。私、苗字で呼ばれるのあんま好きじゃないから、呼ぶのなら名前で呼んでくれないかしら」

「あつ、そうなの……えつと、名前なんだっけ？」

「かおるよ」

そんなやり取りを聞いて……かおるさんは僕になよよしてると言ったが、彼女もまた他人と話すのは苦手じゃないか、と思った。

そして、席を立つ……。

やることはただ一つ。

僕は以前、僕に話しかけてきたクラスの中心の彼のもとへむかう。名前は知らない。

「ねえ……少しいい？」

「あれ……綾瀬君だよ？ いいけど、どうしたの」

「うん、今日この後、なんか集まりがあるらしいけど……」

「ああ、あるある期末テストお疲れ会でクラスの皆で飯食べに行くよ」

「それ……僕も行っていない？」

「えっ？」

当然のことながら彼は驚いていた。しかし、そこはさすがに今までクラスで、立ち回ってきた彼らしい。すぐにニコニコとした笑みを顔に戻して言った。

「いいよ。じゃあ綾瀬君も参加するって言っとくね」

「うん、ありがとう」

僕は彼にお礼を言うとう自分の席まで戻った。そこで、僕もちゃんと話そうとすればシャキッとできるんだという面持ちで彼女の方を見たが、既にそこにはかおるさんはいなく。ただ、悪戯にそこにいた女子に不審がられただけだった。

はあ……と大きなため息をする。

まあ、そういう事もあるさ、そう思い僕は再び窓を見あげた。

窓から見える桜の木は僕を笑うように揺れていた。

*

角膜を焼くまばゆい光に僕はこれはこれでいいものだなと思った。

何の細工もされていない原色の光。それらをただ無作為に散りばめるだけで、今この場を取り繕う雰囲気を出している。

それは、現代に生きる人間のような、と批評家取りになって考えていた。

僕は今カラオケボックスのある一室にいる。あの後、かおるさんを含めたクラスの数人とその場だけの会話をし、ご飯を食べ、適当に相槌を打ち、カラオケボックスに入った。

残念ながらかおるさんとは別部屋になってしまったが、かえってそっちの方が僕にはいい気がしていた。

場を適当につないで僕はトイレに出た、別にトイレに行きたいわけではなかったが何となくだ。

そして、ちやうど飲み物を持ったかおるさんと出会った。

このことにまたしても何の予感も作用しなかったので、僕は驚きを隠しきれなかった。

そして、それは向こうも同じらしく目をいつかのよう丸くしていた。

僕は急いで目をそらした……まだあの春の教訓は僕の中にあつたようだ。

訪れる沈黙。

しかし、それを破つたのはかおるさんの方からだった。

「めずらしいね」

思わずえつ、と短く漏らす。彼女は続ける。

「綾瀬君、こういうの好きなタイプじゃないでしょ？」

僕は咄嗟に誤魔化そうとしたが、それは今までのようにはいかなかった。

「えっ……うん、あんまり好きじゃないタイプだよ」

そのおかしな態度に彼女は変な答え方と、含み笑いをし、じゃあ、どうして来たのと聞いた。

そのシンプルな問いに僕は答えあぐねた。だって、そうだろう明確な答えが目の前にいるな

んて言えるわけがない。

再び、黙ってしまった僕に彼女はにやりと笑う。

「あつ、もしかして私が来たから、わざわざついて来たの？」

「……」

ここで困った風に口を閉ざしていれば、彼女はすぐに前言撤回して、いつもの冷めた顔に戻るだろう。

しかし、僕はここで何故かそれをしなかった。

「そうだよ」

それは何の予言や虫の知らせはなく、僕自身から生まれたイレギュラーだった。

彼女はそれを聞いて一瞬、何のことかわからないようだった。しかし、すぐに顔を真っ赤にする。僕はそこに間髪入れずに言葉を畳みかける

「こんな集まりに興味なんて全くないよ。僕はただ、かおるさんが来るようだったから来ただけだ」

今ここで冗談と言えばまた、間に合うだろう。だが何に間に合う？ 仮にそんなものに間に合ったところで何の意味もない。

「でも、興味がないのはかおるさんも同じだろう？」

「そ、それは……そうだけど……」

そう真っ赤な顔をして、口を濁す彼女は今朝の僕よりはなよなよとしていた。

「なら話は早い、こんなつまらない所なんて抜け出そう」

そういつて彼女の手を取る。彼女はええっ！と驚いていたがお構いなしに手を引く。彼女は手を引かれ、顔を真っ赤にして言う。

「ちよつと！ どうしてそうなるのよ？」

「そんなの簡単だよ、僕はこの空間に興味がない。そして、それは君も同じ。ほら、ここから抜け出すわけができた」

彼女はそうじゃなくて、と僕を引き留める。僕がある程度、手を強く握っているせいで彼女は手を繋いだまま。その事に今更、恥ずかしくなったが別に気にする必要もない。

「そうじゃなかったら、一体何なのさ」

「一体何って言われても、そんなの何もかもだよ。綾瀬君、急にどうしたの？」

「別に僕はどうもしてないさ、いつも通りだよ」

しかし、彼女はその言葉に納得がいかないように続ける。

「いつも通りって……いつもの君はこんなことするようない……」

「かおるさん、君が言ういつも通りって何さ」

「……それは」

そう口ごもる彼女に僕は明確に言い切る。

「そんなの君が作っている僕の自己像にすぎない。だけど、今は……今この場での真実はここにいる僕だ。そうだろう？」

彼女の顔はそこで初めて疑惑に曇った。

「……君はいったい誰なの？」

その疑問に僕の口はいつの間にか微笑の形になっていた。

その微笑は彼女を許すように、彼女を安心させるように、そして彼女を見透かすように……

そして、どこかの誰かのようにひしやげていく。

だって、僕は……

「ただの友達だよ、そうだろう」

*

カラオケボックスを出て、繁華街を抜け、僕たちは夜の公園を歩いていた。手はもう繋いでいない。

ここに来るまで二人の間には沈黙しかなかった。

そして僕は唐突にそれを破った。

「僕の親友にね、コーエンってやつがいるんだ」

「そいつはまたおかしな奴でさ……僕が言いたいことを初めからわかっているような口ぶりで、いつも僕に変な忠告するんだ。信用がどうかか普遍性がなんだとか……」

「でも、今、気付いたんだ。彼は僕自身だった」

ああ、そつだ。それなら今まで彼と話している時に感じる、予言のような警笛も納得がいく。

「そのコーエンが、つまりは僕自身が君の何かおびえていたんだ……。それは多分、僕が僕自身の世界を守るための防衛本能……その類だと思っ」

そこまで語ってから、僕は彼女の顔を見やる。その眼は僕の事をまっすぐに見ていた。

「だけど、僕の自己防衛すら破綻させるほど、君の存在は僕にとって強大なものだった。」

そして、僕は立ち止まり短く息を吐いて言った。

「だから、かおるさん……僕の親友になってくれないか」

彼女は僕の少し前でゆっくりと振り返り言った。

「何言ってるの、君」

「え……」

「強引に連れ出すから、私……告白でもされちゃうのかと思ったけど。そしたら、急に自分は二重人格だって言い始めるし、挙句の果てに親友になってくれなんて、本当にわけわからないね、君」

そういうと、彼女はくすりと笑って言う。

「君の事、人のことジロジロ見る変態だと思ってたけど、違うみたい。君は本物の変態さんだね」

「そこまで言うと、彼女は皆のものにもどろろと言った。」

そして、最後に振り替えると笑って言った。初めての笑顔だった。

「さっきのあれ……もしかして綾瀬君なりの告白だった？」

その日以来僕はどんなに待ってもあの公園に彼は現れることはなかった。むしろ始めから、そんな奴はいなかったようにも思えてきた。

そして、学校帰りに公園による代わりに彼女と過ごすことが多くなった。

今でも、僕はあの微笑を忘れることができない。

だって……

「だって、僕は君の親友だから……」

あとがき

この度は「告白」を読んでいただきありがとうございます。

これを書くために僕はあまり寝ていなくて……と思ったのですが結構、寝てました。

「あれです……すいません。」

今はこのあとがきを、どれだけ早く書き終わるかを考えています。

なので、もうあとがきを終わらせます。